こむらど MINI-NEWS | No. 16 | 1974.12.20 こむらどつうしん委員会

エリトリア解放戦線の結成

エチオピアの中心は、アジス・アベバ地区から北方に延びるエチオピア高原である。ここにアラビアから移来したセム族と混血したハム族のうち、アムハラ族とティグリア族が定着している。その生活様式は農耕であり、その政治的表現はエチオピア帝国、宗教はコプト派キリスト教である。この高原は多数の異民族によって取り巻かれている。北方エリトリアにはラタライ族とサホ族、紅海平原にはダナキル(アファル)族、南部にはガラ族、南東にはソマリ族がいる。かれらの生活様式は多くの場合、遊牧であり、宗教は主として回教である。

エチオピアの中心を成す高原の、さらに中心を成しているのは、アジス・アベバを含むシヨア州であり、ここに住むアムハラ族が皇族と政府高官の大部分を占め、残りの政府高官はシヨア州以外の高原に住むアムハラ族;ティグリア族、エリトリア・ティグリア族、あるいは同化したガラ族などによって占められている。高原を取り巻いて拡がる諸部族は、かれらの政治的意志を高原に伝える政党を欠いており、高原のかれらに対する政治は一方的支配である。高原の意志は全体の意志でなければならないし、この意志を具体的に担って来たのが皇帝であった。

高原の北方、スーダン国境から紅海沿岸にかけて拡がるエリトリアは、1935年、イタリアによって占領され、1941年の平和条約に基き、この地域に対する一切の権利を放棄したので、その最終処分が米英仏ソ四ヶ国の決定に委ねられ1952年の国連総会の決定により、エチオピアと連邦を形成することになった。

その後、エチオピアは、エリトリアを皇帝に統合させるために、次第にエリトリア自治政府と議会とを切り崩し、1962年ついに連邦を廃し、エリトリアを自国の一州にし、総督を任命した。この頃からエリトリアの国粋派の間で、とくに、西部においてこれに抗議するゲリラ運動が始まり、高原北部のキリスト教エリトリア人からの支持も加わった。そしてこの抗議運動は1965年頃に

エリトリア解放戦線（ELF）の結成となり、本部がダマスカスにおかれた。

ELF は当初からアラブ＝回教諸国に援助を求めた。シリアはスーダンを通じて武器を送り、リビアやサウジ、アラビアの保守政権も宗教的立場から援助した。しかし、1967年の戦争の結果、アラブの援助が杜絶し、ELF は一時苦境に陥ったので、1968年、決定的にアラブ＝回教側に立つことを決定し、パレスチナゲリラとの接触触を深め、この苦境を脱しようとしたようである。そしてアラブ諸国にとってエリトリアの分離運動を支持することは、連鎖反応によって、ナイルの水の7割の源をなし、この地域唯一のイスラエルの友邦であるエチオピアを崩壊させ、エリトリアの紅海岸を支配し、仏領アファ・イサ（TFAI）をソマリア民主共和国へ吸収することによって、バブ・アル・マンデブを確保できることを意味した。そしてこの頃は、'67年の戦争に続きソ連、東欧の兵器がアラブ諸国へ大量に流入していた時であり、これが一方ではスーダンを通じ、他方ではイエメン人民民主共和国を経てELFに渡された。かくして'69年初め以来ELFの活動が再燃した。

国際的にはエチオピア航空に対する攻撃とハイジャックになり、国内的には警察、道路、アスマラ＝マッサワ鉄道さえも攻撃の対称となり、主要道路の大部分が危険になった。'70年1月にはアスマラ駐在のアメリカ総領事が誘拐され、その年末には、エリトリア駐在の軍司令官が自宅路上で殺害されるまでに至った。エチオピアは主要都市や幹線道路に対する防衛を固めたのち、スーダン国境に一連の要塞村を建設し、敵性村落の焼却や爆撃を開始した。70年12月の大攻撃では、ELF 1,000人が殺され、何千の家が焼かれ、37,000人が、スーダンに亡命したと記されている。

これを緯にELFの活動は著しく後退することになった。エチオピアの軍事作戦の成功もあったろうが、ELF自体の内部問題と国際環境の変化が大きく影響したようである。

——飯田藤次「回教の海とモリスト教の孤島」
『世界』1974年6月より——

民話『リスとカバ』 ―アフリカの民話シリーズⅠ―

おはなし、おはなし。……ある日、リスとクモは河へ行きました。その日の河の水かさはいつもより増していました。そこでクモはその河の向う岸にとどくまで、一生懸命糸を紡いで風に流しました。が、それをリスは切ってしまいました。クモはおこって、とうとうケンカになってしまいました。

そのあと、クモは河に糸をわたしました。リスは、「ぼくのクモくん、あちら側へ渡らせてくれたまえ！」と言いました。

クモは、今にも切れてしまいそうな細い糸を二本出して紡ぎました。糸が風に流されて向う岸につくと、リスは、糸をつたって河を渡り始めました。河のちょうど真中あたりまで来た時、とうとう細い糸は切れてしまって、馬鹿なリスは、河におっこち、ブクブクブクブク と水の中に沈んでしまいました。

リスは、水の中に沈んだあと、カバに会いに行きました。そこでリスは悪想意をめぐらして、カバに迫めてくれとたのんだ。カバは、「それならいいですよ。」と答えた。リスは、「母があなたがたのところまで行って、めしごしろえをしてやりなと言ったのでやってきたのです。母が、行ってあなたがたに飯をつくってやりなさいといったので！……」と言いました。（実は リスはカバの子に目をつけていていつか食べてやろうと思っていたのでした。）

カバは、「そうですか。それではしばらく出かけますから、子どもたちをよろしくたのみますよ。」と言って、出ていってしまいました。

リスは毎朝、カバの子を一匹ずつ料理した。リスは毎朝、カバの子を一匹ずつ料理した。リスは毎日、カバの子を一匹ずつ料理していきましたが、ある日、とうとう、親カバが家に帰ってきました。リスは、このままここにいたら、バレてしまうので、また悪知恵をめぐらして、親カバにこうたのみました。

「母が死にかけていますので、すみませんがここから出して下さい！。早く早く！ いそいで帰らなくては…。」といいました。カバはそれを不思計に思いましたが、自分の背に乗せて岸まで帰すことにしました。河を泳いでいると、カバの子供たちが、「母チャン。その背中に乗っている悪リスがぼくたち

の兄弟を食っちまったんだよ！　帰っておいでよ！。」とさけびましたが、水の中を泳いでいるカバには、それがよく聞きとれないので、リスに子供が何を言っているのかたずねました。リスは、「お母ちゃんが死にかけているんだってさ。」と答えました。馬鹿なカバはリスを岸に送り届けました。リスは、カバが岸におろさないなや、ウマクヤッタモンサ、と逃げ出し、穴の中に逃げ込んでしまった。

親カバが家に戻ると、子カバの一匹が、「母ちゃん。兄弟たちはリスに食べさせられてしまったんだよ。」と言いました。母カバは、怒って、「よろし、みてなさい。」と言って、リスをつかまえに、穴のところへ行きました。

穴の前へやって来たカバは、しばらく穴をのぞいていましたが、お腹がすいて来たので、頃度そこを通りかかったカラスに、伴間をよんでくると言って、穴のから、見張りをたのみました。

その時、リスは穴の中で骨をポリポリ音をさせて食べていました。カラスは言いました。「リスくん。何を食べてるんだい？。」　するとリスは、「何を食ってるかって？　そりゃおうまい骨だよ。」「それをくれたまえ。」「大きく目を開けて、あくびでもしてみなよ！　そしたらやるさ。」

そこでカラスは、大きな目をしてあくびをしました。そこをすかさずリスは、土を取り、カラスの目と口めがけて投げつけました。「プップップッ、こりゃたまらん。」とカラスが身をすくませたすきに、リスは、その穴から逃げ、林の中にもぐり込んでしまいました。ウマイモンサ。リスは倒れた木のねっこの中に入ってしまいました。

そこへ　カバどもがやってきて、手を穴に突っ込んで木の根をつかんだ。すると、リスは、「そりゃ、わしのシッポだよ！」と言いました。カバがリスの尾をつかんだ時には、「それは、僕のシッポじゃないですよ。それは僕のシッポじゃないよ……！」と言いました。でもおしまいには、みんなはリスをつかまえました。みんなでリスを引っぱり出して、リスの上にまたがりました。

そこで、リスは「私の国では、人をこんなところで処刑しませんよ！あそこをごらん下さい。あそこに木があるでしょう。私の国では、木の上で処刑するの

です。と言いました。そこでみんなは、りえを木の下までつれて行きました。

母カバが登ろうとしたところ、りえはそれをみて、「あんたの性器は大きいなあ。あんたの性器は大きいなあ！」と悪口を言いました。母カバはおりて来て、それからまた登ろうとしました。「性器がやっと小さくなりやがった」とりえが言うと母カバは木から降りてしまいました。こんどは子カバが登りかけると、りえはまた、「子カバの性器のほうが母カバのより大きい！　子カバのものの方が大きい！　大きい！」と言いました。それで子カバは降りて来ました。

そこで、みんながりえに命じた。「りえくん、君も登りたまえ！」するとりえは木の上に登って、こしかけました。そうして「なーい！　私はここにいます！」と叫んだ。「どうしたんだりえくん」とカバたちはりえに訊ねました。

「首長の息子さきのために、カバの皮をおさがしになっているってさ。首長はよめさんに子供が生まれたんで入用だってさ。」とりえは言った。カバたちは、「で、その家来たちはどの辺まで来てるんだね。」と訊ねた。りえは、「それがあそこだ」と言いました。馬鹿なカバたちは走り出した。「ほれ人間どもは私の空地のへんにいるさ。ほれ、人間どもは私の空地に。ほれあそこに。」とりえは言った。子カバたちはそれを聞いて、おどろいて、あっちこっち逃げまどい、つかれのあまり、みんなころんで死んでしまいました。りえは木から降りて、そのカバたちの皮をはいでしまって、首長のところへ持って行った。家来たちはそれを受け取り、母カバもその皮でばってしまいました。そしてカバたちは全滅してしまった。——

（北部カメルンにて『フルベ族の語り』より）

フルベ族の住むサヴァンナには多くの野性動物がいる。その動物たちはいわゆる動物説話の主役として活躍する。「実際には動物といっても物語の中では擬人化されているので、人間が主役になるほかの物語と本質的にはなんら変わりがない。しかし、擬人化された動物にその動物の持つ体つき、動作、性質などをこまかに物語の中にとり込み、物語を生き生きしたものにしている。

フルベ族が最も好む動物の登場するストーリーのほとんどは、力を持った大型獣を知恵を持つ小型の動物が翻弄するというスジを持っている。いわゆる

トリックスターの登場する物語である。前述の知恵を持っている動物はすべてトリックスターになる。トリックスターの相手役をする力を持つ動物がする。トリックスターの代表はリスで、その相手の代表は、ハイエナである場合が圧倒的に多い。

リスとハイエナの性質は、いろいろの点から見ても対立する要素を持っている。その対立要素が民話の中でたくみに生かされている。リスとハイエナの性質を観察による実際の性質と物語の中に出てくる擬人的性質とを表にしてみると次のようになる。

カテゴリー ＼ 性質	リス	ハイエナ
	実際 → 擬人	実際 → 擬人
1) 動作	迅速 → 機敏	にぶい → のろま
2) 力	ない →	ある → 暴力
3) 食物	果物・穀物 → イスラム教徒	(肉) → (非イスラム教徒)
4) 体つき	小さく美しい → スマート	ぶかっこう → みにくい
5) 住んでいる場所	人の身近 → 新しさ	野原 → 恐怖
6) 出没する時	昼 → 明るさ	夜 → 暗さ

これらの性質を短く表現すると、リスは悪賢く、ハイエナは力はあるが頭が悪いということになる。

(今回はハイエナが カバになっている。)

(『アフリカの文化と言語』より)

以下 次回。

1774年より

きょうあり。

(編集 桃大アフリカ研)